

およその数

し しや ご にゆう
〈四捨五入物語〉

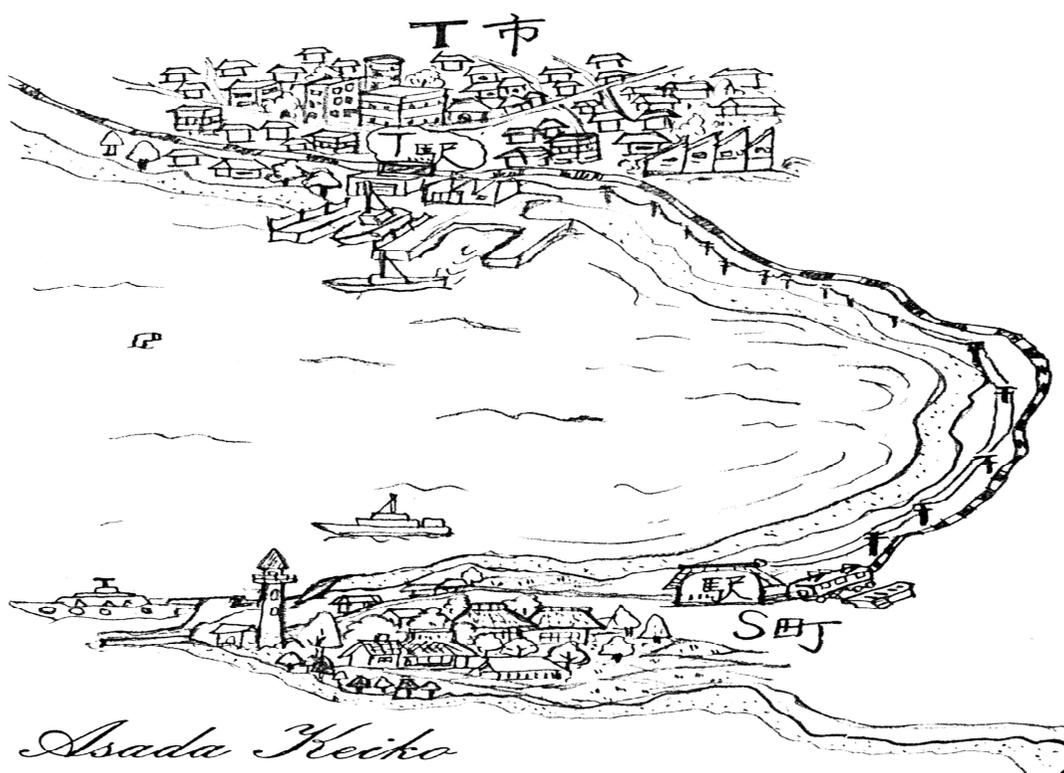
____年____組 なまえ_____

■プロローグ

【おはなし1】

S町は海^{うみ}辺にある小さな町です。海につき出た半島^{はんとう}の先にあつて、海をはさんだ向かい側にはこの辺りで一番大きな都市・T市があります。

S町からT市へ行くためには、半島のつけねまで行ってから電車に乗らなければならない2時間もかかります。ところが船を使って海をわたると、たったの10分でT市に着くのです。



そんなS町に船会社がやってきて〈わたし船〉を始めたのは、今から40年も前のことでした。

■第 I 章

【おはなし 2】

その船会社は10人乗り, 20人乗り, 30人乗り, 40人乗り, 50人乗り…とたくさんの船を持っていました。そして、その船を使ってS町の人をT市まで運ぶ仕事を始めたのです。町人は「これは便利になった!」とよろこび、さっそく船に乗りに出かけたのでした。

ところが町の人たちが船着き場で見たのは次のようなかん板ばんでした。

わたし船は10人にならないと出発あしません。悪あしからず。

町の人たちは、びっくりぎょうてん!

Aさん「これは10人をこえていたら何人でも乗せてくれるということかな?」

Bさん「いや、10人とか20人とかのキリのいい人数でしか運ばずに、はんばな人数はおいてけぼりになるんとかやうか?」

などと話し合いましたが「ここでブツブツ言ってもはじまらん」と船会社に行って説明を聞くことにしました。

Aさん「社長、あのかん板はどういう意味ですか?」

社 長「私んトコには10人乗り, 20人乗り…とたくさんの船がありますが、船長せんちょうが1人しかいないので、しかたなしに10人でくぎりたいと思います」

Bさん「ということは、17人の客がおったら20人乗りの船で運んでくれるんですね?」

社 長「いや、すみませんが、そういうときは7人の人にはガマンしてもらって、10人乗りの船で運ばせてもらいます」

Aさん「そんな〜。17人なら20人乗りの船を出せば運べるのに…」

社 長「そんなアマイことしてたらもうかりまへんがな」

町の人にはしかたなく引き下がったのでした。

【問題 1】

①33人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るのでしょうか？

[]

②49人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るのでしょうか？

[]

③8人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るのでしょうか？

[]

【質問 1】

9人の人が船着き場で待っていましたが、しばらく待ってもあと1人がきそうにありません。そこで、9人でも10人乗りの船を出してくれるようにたのんだのですが、「10人にたりないので船は出せません」と、ことわれました。あなたがお客だとしたらどう思いますか？

[]

【質問 2】

こんなことをつづけていると船会社はどうかと思いますか？

[]

【おはなし3】

船会社のやり方は町の人をととても困らせました。そればかりか、船に乗せてもらえなかった人たちはカンカンにおこりました。特に、8人とか9人で残された時には「もうひとつ大きな船を出して乗せろ！」とどなったりしました。そのうち町の人のおほとんどがおこりだして、ついにはだれも船に乗らなくなってしまいました。

さあ、こまったのは船会社です。何しろ、お客が乗ってくれないことには商売になりません。そこで、今度はこんなかん板を出しました。

今まではゴメンナサイ。これからは人数にあわせて大きい船で運びます。もうしわけありませんでした。

かん板を見た町人は「これでいつでもT市へ買い物に行けるゾ！」と大よろこび。ドンドン船を使うようになったのです。

【問題2】

①19人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

②23人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

③1人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

【質問3】

たった1人のお客に10人のりの船を出していて、船会社はもうかるのでしょうか？ あなたはどう思いますか？

[]

【おはなし4】

今度の会社のやり方に町の人は大満足でした。これでこまることが無くなったからです。

ところが、車を持つ人がだんだん増えてくると、渡し船に乗る人が少なくなってきました。でも、1人でもお客がいればわたし船は出さなくてははいけません。ついに船を出してもうかるお金よりも、船を動かすためのお金(燃料など)のほうが多くなってしまいました。

【質問4】

船会社はいったいどうなってしまうのでしょうか？

[]

■第Ⅱ章

【おはなし5】

町の人たちの心配していたことがつい起こりました。船着き場に次のようなかん板が出たのです。

町のみなさんの^{きぼう}希望にあわせ、たとえ1人でもわたし船を出してきましたが、もうアキマヘン！ 全ぜんもうかりまへん！！
会社がつぶれる前に、わたし船はやめることにします。

乗る人が少なくなっていたとはいえ、町の人にとって〈わたし船〉は大切なものでした。特に、車を持っていない人、体の弱い病人やお年より、それからT市の学校に通っている子どもたちにとって、わたし船が無くなるのは大問題でした。そこでもう1度、船会社へたのみにいきました。

Aさん「社長、何とかわたし船を続けてもらえませんか？」

社 長「アキマヘン。1人や2人のために船を出しとったんでは、ムリですワ」

Bさん「そうですか…。それじゃあ、何人ぐらいやったら^{そん}損せんのですか？」

社 長「う～ん、そうやなあ～。まあ、7人やなあ～」

Cさん「7人？ ちょっと多すぎるで。3人ではダメですか？」

社 長「アカン、アカン、1人も2人も3人もいっしょや」

【質問5】

話はなかなかまとまりません。でも社長も町の人も何とかしようと考えています。あなたは何人ぐらいで折り合^おい^あをつけたらよいと思いますか？

〔 _____人ぐらい ； その理由は？ 〕

【おはなし6】

社長と町の人のお話し合いは夜おそくまでつづきました。

社 長「そしたら、6人で出すことにしましょう」

Bさん「6人？ 4人くらいで何とかありませんか？」

社 長「4人？ そんなん、商売あがったりや！」

Cさん「じゃあ5人！ 5人で何とかして下さい!!」

社 長「う～ん…」

Bさん「おねがいします、社長！」

社 長「…わかった、わかりましたよ、それでいきましょ」

Aさん「そしたら、はんぱな人数が4人の時はお客さんにガマンを
してもらって、5人以上やったら大きい船を出すという
ということですか？」

社 長「そうです。苦しいけど、それでいかせてもらいます。その
かわり、わたし船をドンドン使って下さいよ」

全 員「わかりました！」

ということで、船会社はわたし船をつづけることになったのでした。

【問題 3】

①17人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

②21人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

③44人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

④55人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

⑤98人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

⑥116人の人が船着き場に来ました。何人乗りの船が出るでしょう。

[]

【おはなし7】

船会社の話は、これでおしまいです。おもしろかったですか？

さて、算数・数学の言葉では、はんばのお客を残して船に乗せないようなやり方（例えばお客が27人いても20人乗りの船を出すやり方）を〈切り捨^すて〉と言います。はんば(わたし船の場合は十の位^{くらい}以下の数)を〈切^すって〉〈捨^すてる〉という意味です。

反対にはんばはぜんぶ上の位に入れるやり方（例えばお客が34人なら40人乗りの船を出すやり方）を〈切り^あ上げ〉と言います。

そして最後に話し合いで決めた「お客さんが14人だったら10人乗りの船を出す。25人だったら30人乗りの船を出す…」というようなやり方を〈四捨^し五^し入^ごに^にゆ^う〉と言います。はんばの数が4までだったら切り捨^すて(四以下は捨^すてる)、5より大きかったら切り上^あげる(五以上は入^いれる)、というやり方です。

また〈切り上げ〉〈切り捨^すて〉〈四捨^し五^し入^ごに^にゆ^う〉などをつかって求めた「だいたいの数」「およその数」のことを〈^{すう}ろし、^{すう}数〉といい、「だいたい200人」とか「およそ300円」を、「^{やく}約200人」とか「^{やく}約300円」と言います。

< おしまい >

〔この物語は、香川県の石原清貴さんに教えていただきました。〕
(1997年5月版)